

近世後期における平安朝物語の図説化

―装束関連の書を中心に―

森 田 直 美

要 旨 近世中期から後期には、『源氏物語』を中心とした平安朝文学にあらわれる、装束・調度・建築等を図で示し、注解を施した書が多く著された。本稿では、その中でも特に装束関連の図説書に注目し、江戸後期に成立した『源氏装束図式文化考』（国文学研究資料館蔵）、及び『源語図式抄』（大阪府立中之島図書館蔵）を、その一例として取り上げ、紹介する。一条兼良の『花鳥余情』という、『源氏物語』の注釈書でありながら、平安朝装束に関する有職故実書的な性質をもつ書が現われて以降、特に『源氏物語』を素材とし、平安朝の装束・調度に特化した書を再編しようという動きは少なくなかった。その典型的な例の一つとして、江戸中期に著された『源氏男女装束抄』が挙げられる。そして近世後期に至ると、この『源氏男女装束抄』に触発され、これをすすめて『源氏物語』の装束を図説した書が現われてくる。それが『源氏装束図式文化考』であり、『源語図式抄』なのである。

また、本稿では更に、近世後期から末期の有職故実家、松岡行義、斎藤彦磨の業績に触れ、この時期が平安朝物語図説の最盛期的様相を示していることについても言及する。

はじめに

江戸時代後期には、『源氏物語』を中心とした平安朝文学を材として、そこにあらわれる、装束・調度・建築等の図を呈し、注解を施す、すなわち「図説」というスタイルを取った書が多数あらわれた。本稿は、この「図説化」という現象に注目し、そうした書が生成される一端について考察することを目的とするものである。具体的には、まず中世成立の『源氏物語』古注釈に端を発し、中世から近世にかけて、物語中の装束に特化した有職故実書が記されてゆく過程について触れ、次に、その中世の「装束抄」が、やがて近世において「平安朝物語の図説化」という現象に立ち至ることに注目し、これに関連する著書を数点取り上げ、その生成の契機となった文献や出典について考察する。そして最後に、紹介した文献の成立期や、成立の場を推しはかるべく、近世後期における「平安朝物語の図説化」を語る上で、おそらく最も注目すべき人物である、松岡行義・斎藤彦磨の著作について触れたい。

一条兼良から『源語装束抄』『源氏物語装束抄』『源氏男女装束抄』へ

ではまず、中世の『源氏』古注釈から、装束学に特化した有職故実書が生成されてゆく過程について、これは先行研究に委ねる部分が大きいが、確認してゆく。

中世に成立した『源氏物語』古注釈の中で、特に「装束に関する記述」に注目した場合、真っ先に名前が挙がるのは、『花鳥余情』だろう。ここで、一面有職故実書的な性質を携えた『花鳥余情』に関する武井和人氏の論(注①)を引用

したい（以下、本稿に掲出する先行研究論文、及び有職故実書本文の傍線は、全て筆者による）。

『花鳥余情』なる著作は、令学・江次第学における研究成果の一結実だったのと同じく、装束学の一結実だったといふことである。更にいへば、実は、『花鳥余情』で兼良が試みた対象は、『源語』のみではなく、古代世界総体であつたのであらう。しかもこの性格が『花鳥余情』のみにあてはまるのでは恐らくなく、兼良学全般を覆ふものであつたらしいことを予感するのである。ただ『花鳥余情』においてより先鋭に表出しただけなのだらう。

武井氏が述べられている通り、『花鳥余情』は、他のどの『源氏』古注釈よりも、作中装束に関して多数、かつ詳細な解説を施し、ある種「古代装束の解説書」としての性質を有している。そうした『花鳥余情』の性質に影響を受け、ここから装束に特化した書を再編しようという動きは、中世・近世を通して見られる。小川陽子氏は（注②）、『花鳥余情』の装束記事を基として、室町中期の連歌師・肖柏作と目される『源氏物語装束抄』や、室町後期の連歌師・宗碩による『源氏男女装束抄』が作られていくこと、そして、兼良の『花鳥余情』以外の著作に記された装束に関する記述を基に、兼良の息子・一条冬良が『源語装束抄』を記したであろうことを論じられている。すなわち、『源氏物語』を素材として、古代装束を学ぼうとする動きの源は、一条兼良の著作にあつたということを、明らかにされたのである。

またここで、このような「平安朝物語を素材として、古代装束への理解を促す書」が生成される際の、書き手の意識の参考として、『源氏男女装束抄』享保二年版に附された、連歌師・昌億の序の一部を挙げておく（読解の便宜上、私に濁点・句読点を施した）。

こゝに壺井義知、官職の故実をこのむあまり、碩翁の抄出せる書の、ちにかさねて事をつき、猶あまれるを上
にしろして色あひしざまをくはしくあらはせり。まことにこの物がたりをもてあそぶ人のためのみならず、官し
よくをまなぶるたよりにもならんかし。

このように序に記されることが非常に象徴的だと思われるが、一条兼良の源氏学の内、「物語を読解するため」と
いうよりもむしろ「有職を学ぶたより」として、これに資する部分だけが抄出され、いくつかの装束抄が記され、享
受されていたのだらうという背景を窺い知ることができる。

さて、本稿が注目する「平安朝物語にあらわれる装束の図説化」も、その発生の淵源の一端には、兼良の学問があ
ると言える。なぜならば、これから紹介する、『源氏物語』の装束を図解した二つの書は、いずれも『源氏男女装束抄』
に触発され、作成されたものだからである。順に確認してゆく。

作中装束図説化の一端——『源氏男女装束抄』から『源氏装束図式文化考』『源語図式抄』へ——

さて、国文学研究資料館・日本古典籍総合目録DBの検索を元に、『源氏物語』を素材とし、特に装束に重点を置いて
図説を試みた書として挙げられるのは、これから紹介する『源氏装束図式文化考』と、『源語図式抄』である。以下、
この両書に提示されている図像の出典を確認し、また本文内容から、この二書の生成を促したと思われる文献につい
て指摘してゆく。

まず、国文学研究資料館・初雁文庫蔵の『源氏装束図式文化考』（初雁12・511、図像①）から見てゆきたい（注③）。

本書は、もとは上下巻、もしくは上中下巻一組であったと思われるが、初雁文庫が所蔵するものは下巻のみの残闕本である。以下、本書の基本的な書誌情報を掲げる。



図 ①

【書誌】

胡桃染色地唐花唐草文様表紙

袋綴 一冊（下巻のみの残闕本）

二四、一×一六、八 cm

墨付二三丁、遊紙なし

現在、初雁文庫以外に確認できる伝本としては、東海大学桃園文庫本がある。しかし桃園文庫本は、初雁文庫本を字形まで似せて忠実に写した臨模本で、やはり下巻部分のみしか存在しない。桃園文庫本には、「源氏装束文化考（西

下本)「初雁文庫本か」と書いた、メモ書きが添付されており、おそらくは西下経一氏、もしくはその周辺人物によって写された新写本だと考えられる。つまり、この『源氏装束図式文化考』という書を完全な形で伝える伝本は現在のところ確認できず、その全容を知ることとはできないというのが現状である。

しかし、残ったのが下巻ということで、巻末にある自跋によって、著者と、本書が執筆されることとなったきっかけを知ることができる。以下、その自跋全文を掲出する(読解の便宜上、私に濁点・句読点を施した)。

自跋

古人此物語をもてあそぶ抄てふあまたの中に、連歌師昌億おきなの源氏装束抄といへる三巻あんめれど、装束の名のみにてその形をしるさず。さるのみならず、こうちぎはひろ袖にして、下着也、とは近代の事にや。草紙のおもむきにたがへり。小うちぎは上らうのうは着にして唐衣のかはりにものすしやうぞくなる事あきらかなり。嵯峨天皇弘仁八年までおのこをんなの衣もろこしをき給ふとなり。今案にその後六十代醍醐天皇延喜式延喜式てふものいできて装束やうの物なべてさだめらる。一書に小袖は永観より後といへり。さあればなべてひろそでなるべきにや。こたび装束図式といへるをえて、源氏装束文化考なりぬ。上つ代のよそほひを、くだれる世においてあらはし侍る。まことに符もて大空をのぞむにひとしかるべけれ。猶後の人の正しき説を待のみ。 中野貞利翁

傍線部を中心に内容を確認すると、この著者は、『源氏物語』を扱う注釈書が多く存在する中に、連歌師昌億の『源氏装束抄』というものがあるものの、装束の名を挙げるのみで、その形状が示されていないことを問題視し、更に、「小桂」を例に挙げ、その注解の不正確さを指摘している。そして、『装束図式』という書を手に入れたことを契機として、

そこに記される装束図を取り入れ、『源氏装束図式文化考』を著したという経緯が記されているのである。

自跋の最後に記される中野貞利という人物が、本書の著者ということになるが、この人物の詳しい素性については、ほとんど分かることがない。よって、本書の成立年などについてもはっきりとしないが、この自跋がいう「昌億の源氏装束抄三巻」とは、前述した宗碩の著書『源氏男女装束抄』に、江戸中期の有職故実家・壺井義知が補訂を行い、それに江戸時代前期から中期の連歌師・里村昌億が序を付した三冊本であると考えられ、これが享保二（一七一七）年の版であるため、本書の成立上限は享保二年ということになる。『源氏装束図式文化考』という外題から、文化年間の成立かとも思われるが、これも推測の域を出ない。

そして本書の注解形式の参考として、まず「赤袍」の図像と解説を挙げる（図②）。

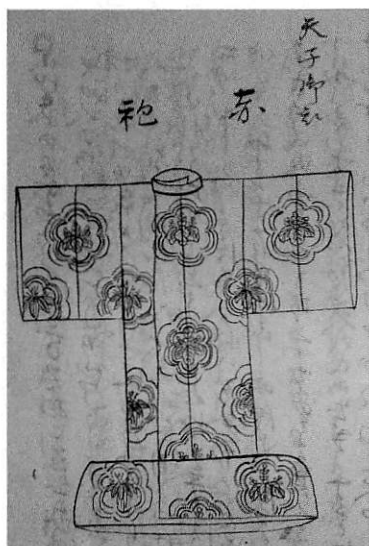


図 ②

○ みゆきの巻玉かつらも御幸見物に立出給へり。おほくの人の御かたち見つ、し給ふ中にも冷泉院みかとあか色の御衣めし奉りてけたかふなそらふ人なし。（中略）中少将殿上人やうの人は何ともみえぬはよく、冷泉院ものす

くれさせ給へるなるへし。源氏の大臣の御かほに帝よく似給ひぬれどみかとにておはしませば思ひなし今すこしうつくしうおそれおほくめて度也（以下略）

このように、まず対象とする装束の名称と図を呈し、その後、その装束が登場する『源氏物語』の該当場面を挙げつつ私見を記するという形を取っている。「赤袍」では、最初に御幸巻で、冷泉帝が纏っている赤色の御衣が「赤袍」にあたるとして例示しているが、それに加えて、傍線部「中少将殿上人やうの人は何ともみえぬは、よくく冷泉院のすくれさせ給へるなるへし。源氏の大臣の御かほに、帝よく似給ひぬれど、みかとにておはしませば、思ひなし今すこしうつくしうおそれおほくめて度也」などと、冷泉帝を目にした玉鬘の心情を推しはかるなど、装束には直接関係のない、物語の内容解釈にまで踏み込んで私見を記している箇所が諸所に見受けられることも、本書の一つの特徴と言える。

また、次に「五重」について図説した箇所について、解説部分を掲出する。

○ 浮舟巻にうき船のきならしたるしろきかぎり五つばかり袖口すそのほとまなまめかしくいろくにあまたかさねたらんよりもうつくし

○ 考 是五重成へし

○ 装束抄曰五つ衣はいにしへのかさねうちきなるへしと也

この傍線部に、「装束抄曰」として「五つ衣はいにしへのかさねうちきなるへしと也」とあるが、『源氏男女装束抄』には該当する本文が見あたらない。よって、別の書を指すのだろうと思われるが、現在のところ該当書誌を特定でき

ておらず、引き続き調査する所存である。この例からも窺えるが、自跋で『源氏男女装束抄』の注解の不正確さを批判していたことに添うように、本書は、『源氏男女装束抄』に触発され、執筆されながらも、注解においてはその影響をあまり受けていないとすることができる。そうした意味では、『源氏男女装束抄』を批判的に継承した書と位置付けることができるだろう。

そして本書の最大の特徴である装束図について、その出典を考察したい。装束図の出典として使用したことが自跋に明記されている『装束図式』は、元禄五（一六八八）年に出雲寺和泉掾から刊行され、現在は国文研他、多くの所蔵先が確認でき、『続群書類従』巻第三百十六にも収められている。ここに収載されている図と、『源氏装束図式文化考』の装束図の幾つかを比べてみると、確かに酷似しており、著者がこれを執筆資料として利用したことは間違いないものと思われる。以下に参考として、両書の「直衣」「指貫」の図を挙げる（図③、④、⑤、⑥）。

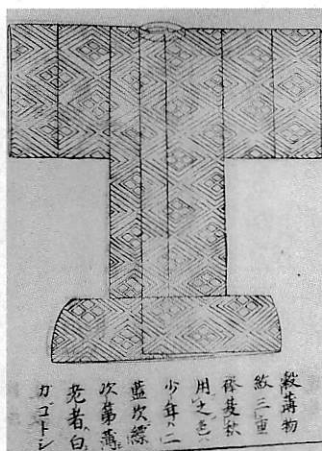


図 ③

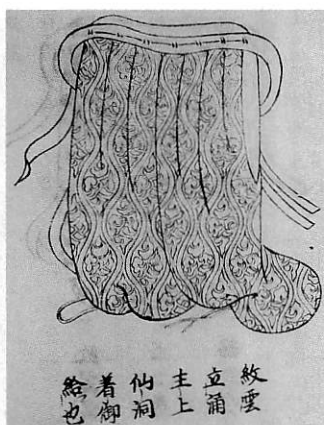


図 ④



図 ⑤



図 ⑥

図③は『装束図式』の「直衣」、図⑤が『源氏装束図式文化考』「直衣」の図である。形、文様ともに忠実に写されていることが分かる。そして図④は『装束図式』の、図⑥は『源氏装束図式文化考』の「指貫」図である。文様がかなり簡略化されているが、指貫の形、しわの入り方、紐の描かれ方など、細かい部分まで一致している。

以上のような例から、自跋に記されるとおり、『装束図式』が『源氏装束図式文化考』の出典のひとつであることが確認できる。

しかし、『装束図式』には、『源氏装束図式文化考』に見える女性装束の図は収載されていない。自跋に記される出典元は『装束図式』のみであるため、女性装束はどういった資料を使用したのかを私に調査し、見出し得たのが『装束要領抄』である。これは、江戸中期の有職故実家・壺井義知が、自らの著した『四位五位装束略抄』の注釈・増補の目的で記した上下二巻の書だが、本編には装束図は記されていない。この本編に、義知の弟子・徳田良方が図入りの巻を附し、その三冊一組で正徳六（一七一六）年に刊行されている。ここに所収される「五重」や「唐衣」、「上裳」といった女性装束と、『源氏装束図式文化考』の図を比べてみれば、ここから図が引かれていることは明らかである。

では以下、『源氏装束図式文化考』の女性装束図の出典が『装束要領抄』であることの確認を、「上裳」「五重」を例に行いたい。



図 7



図 9

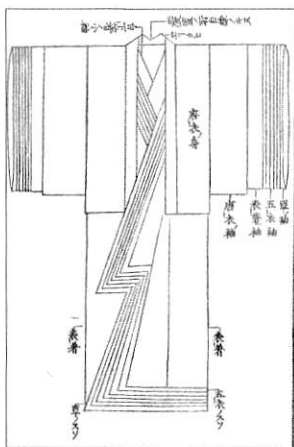


図 8

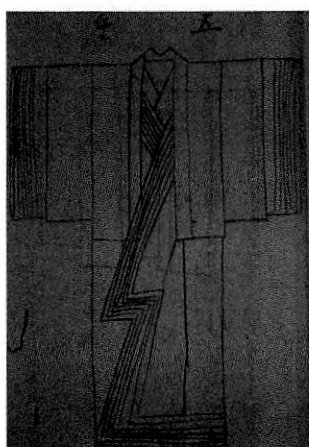


図 10

図⑦は『装束要領抄』の、図⑨が『源氏装束図式文化考』の「上裳」である。文様などの写し取りが若干拙いが、『装束要領抄』の図を使用していることは疑いないだろう。

そして、図⑧『装束要領抄』、図⑩『源氏装束図式文化考』の「五衣」である。『源氏装束図式文化考』は、「五重」

という項目を立てているが、掲出されている装束図は、「五衣」だけでなく、「表着」や「唐衣」まで含めた襲の図である。その理由が定かではなかったが、『装束要領抄』の該当図を確認し、この女性の襲衣の図をそのまま写し取ったために、表着や唐衣も含めて掲出されたのだということが理解できた。

では次に、大阪府立中之島図書館蔵『源語図式抄』について見てゆく。本書には、作者や成立年代が推測できる識語の類がない。しかし、詳しくは後述するが、掲載されている図の引用元の一つとして宝暦五（一七五五）年刊行の『雅遊漫録』が、本文内に明記されているため、本書の成立はそれ以降ということになる。

本書の伝本として確認できるのは、中ノ島図書館蔵本のみである。この書は、前掲した『源氏装束図式文化考』とは異なり、装束以外にも、調度品や楽器の図も収載され、注釈が施されているが、その大部分を占めるのは装束である。

本書の注解の形式・特徴を確認するため、以下に桐壺巻に登場する「無位黄袍」の注解部分を掲出する（図⑪）。



図 ⑪

このように、ページの中央に図を大きく提示し、それを囲むように注釈本文が記され、注釈が一ページに収まらない場合は、次ページ以降に記されている。そして、本書の注解対象となっている『源氏物語』の作中装束、およびそ

の周辺に記された注解は、大方、享保二年版『源氏男女装束抄』に一致するため、これに拠っていることが分かる。つまり、前の『源氏装束図式文化考』を、『源氏男女装束抄』を批判的に継承したものと位置づけるのであれば、この『源語図式抄』は、『源氏男女装束抄』を装束図によって補完する形で継承したものと位置づけることができるだろう。つまり、二書は方向性が異なっているものの、共に享保版『源氏男女装束抄』が成立の一基盤になっているという点では共通しているということなのである。また、装束図の引用元を確認すると、そこにも、この二つの書の共通性が読み取れる。

『源語図式抄』は、本文の所々に、図の出典が明記されている。それは、(ア)『装束要領抄』(イ)『雅遊漫録』、そして(ウ)『南都東大寺絵巻物図』の三点であるが、(ウ)については、現在書誌を特定できていない。また、装束図に関して『装束要領抄』附巻には掲載されていない図も収載されていたため、試みに、前の『源氏装束図式文化考』の出典であった『装束図式』の装束図と照合してみたところ、明らかにこれが装束図の引用元の一つだと確認できた。つまり、『源氏装束図式文化考』と『源語図式抄』は、装束図の出典においても、共通した文献を使用していたということが分るのである。では以下、『源語図式抄』の装束図出典の確認を行いたい。

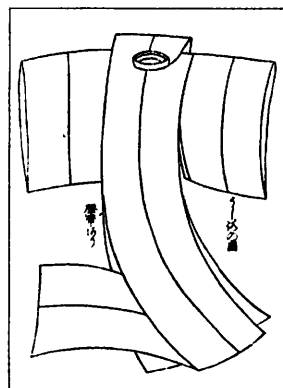


図 12



図 13



図 14



図 15

図12が『装束要領抄』の「汗衫」図、図14が『源語図式抄』に掲げられた「赤朽ち葉のうすものの汗衫」図である。これを比べると、『源語図式抄』は、『装束要領抄』の図を取り込み、物語本文にしたがって、その図に相応しいと考えられる彩色を施していることが分かる。そして図13は『装束要領抄』の「細長」図、図15は『源語図式抄』の「無紋の桜の細長」図である。「無紋の桜の細長」は、『源氏物語』中では若紫の装束として登場しているが、ここでは女性の細長ではなく、童殿上の細長が掲げられてしまっている。このような点から、『源語図抄』の古代装束に対する理解の甘さが窺えることは否めない。

以上のように、『源語図式抄』の装束図出典のひとつは、同書の中に記されているとおり、『装束要領抄』であることが確認できる。

では次に、『装束要領抄』には収載されていない装束図の出典についてである。

図16が『装束図式』の「赤袍」図、図18が『源語図式抄』の「赤色御衣」の図である。文の位置や、左右の身頃が重なり合っている部分など、細かい点まで一致していることから、『装束図式』の図を登用し、彩色したものであることは間違いないだろう。また、図17は『装束図式』の、図19は『源語図式抄』の小忌の舞人装束図だが、これも文様の



図 18

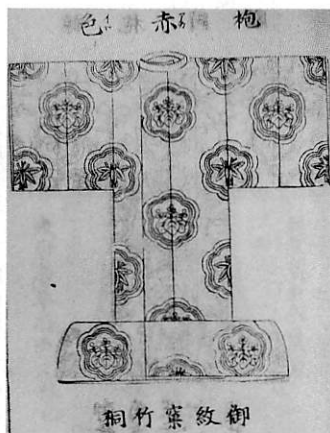


図 16



図 19



図 17

位置や肩口に掛けた赤紐まで、忠実に写されていることが分かる『源語図式抄』中に、図の出典として『装束図式』の書名は挙がっていないものの、以上から、『装束図式』が装束図の出典の一つであろうことが確認できるのである。

さて、本稿の冒頭に記したように、近世後期には、『源氏物語』をはじめ、平安朝物語にあらわれる装束や調度を図説した書が数点記されている。通史的に見れば、このような図説というスタイルを取る注釈は、この時期に集中的に現れているのだが、総数は決して多いとは言えない。「平安朝の物語を素材としているもの」、かつ、「装束に重点を置いているもの」という書に限定すれば、現存するものとして挙げられるのは、今回紹介した二書で、ほぼ全てといえる程度である。その二つの書の、生成基盤になっている書と、装束図の出典が同一であるということから、『平安朝物語』にあらわれる装束の図説化は、近世に描かれた様々な絵画資料を、押しなべて広く取り込んだというよりも、かなり限定的な資料によって、その成立を促されている、ということが言える。そのことを確認した上で、次に進みたい。

松岡行義と斎藤彦麿―平安朝物語図説の最盛―

ここからは、近世後期、「平安朝物語の図説化」という現象において注目すべき人物を取り上げ、その経歴を確認することで、前の二書の成立期や、成立の場を考える上での参考にしたい。

近世後期、特に平安朝物語の図説を強く志向した人物の一人として挙げられるのは、松岡行義である。行義は、江戸後期を代表する有職故実家の一人で、自らの日記『後松日記』には、雅亮装束抄を参考に、二分の一スケールの几帳を制作したことが記されるなど、机上の学問に終始せず、実地調査や、実技実作を重んじる学風が、その大きな特徴であった(注④)。そして、その著書には、『源氏物語』をベースに、主として作中の建築物や建具について図説し

た『源語図抄』があり、更に、その図像や解説を増補した『源語類聚抄』を記している。行義の著作中『源氏』に関連するものとして、この二書以外に『源語問答』という書が認められるが、著作の圧倒的多数を占めるのは特に文学に関わらない有職に関する書であり、彼が平安朝文学の読解そのものにそれほど強い関心があったとは思われない。しかし、幾つかの著作内容を見てみると、有職故実を学ぶ上で、中・近世の文献よりも、『西宮記』や貴族の漢文日記、そして平安朝の物語などを参考にする原点回帰的な姿勢が見て取れるため（注⑤）、そうした作業の一貫で、『源氏物語』のような作品にも目を通していただのたと思われる。

では、なぜ行義は『源氏物語』を材として作中の建築物や装束を図説しようと考えたのだろうか。それを知るために、以下、行義の『源語類聚抄』序文を掲出する。

このものがたりの注抄よ、にいできて、いえいの説いと多かり。みなことのはの心をときあるは、官くらゐのきざみ公事の次第などかしこき人々の書置たるなれば、萬にたらひてなにをかはことさらくはえむ。さはあれど、公私のとのつくり、ころもの色あひ調度のかたちなどは、もれにける思ふに、そのいろかたちもしらで、心詞共のあきらかならむや。かゝるにて、このみくさをかきいだして、ふるき書何れのものごと、絵などかきあつめて、おろかにいとけなき心にもわきまえむにたつきあらしむ。しかあれど、我才、又はかばかりからぬかしこき人にもまねばざればひかめる説もありなむ。かしこき古書にあまたみえ侍るも、さのみはくだしければ、はぶけるも多し。いたかはしきまぎれに書出たるはあやまりもありなむ。大内の図は多く裏松入道の図標かかせ給へる書よりうつせり。又此書にひき用ひしをもとの書をはえ見でたゞにいたるもあり。

傍線部を中心に確認すると、ここには、『源氏物語』には代々多くの注釈が記されているものの、装束や調度の色・形を記したものが無い」ということを問題視し、「おろかにいとけなき心」の者たちにも、読解の手がかりになるようにと、この書を記した」という経緯が記されている。松岡行義の仕事は、同じく江戸後期の有職故実家であり、また国学者でもある斎藤彦磨にも受け継がれていることが、赤澤真理氏によって指摘されている（注⑥）。すなわち、行義の『源語類聚抄』に記載されているいくつかの図像が、彦磨の『源語図集』に転載されているのである。

斎藤彦磨もまた、平安朝物語の図説に強い意欲をもっていたことは、その著作『勢語図説抄』からも伺える（注⑦）。この書には、『伊勢物語』に登場する装束や植物、道具類の参考図が多数記載されており、これほど徹底して図像が提示されたものは、『伊勢物語』の古注釈史上、類を見ない。また、現在のところ伝本が確認できていないが、『国学者伝記集成』によれば、『枕草紙図抄』という著作もあったとされている。

斎藤彦磨と松岡行義の、直接的な交流の詳細は明らかではないが、斎藤彦磨は江戸中期の有職故実家・伊勢貞丈の弟子であり、行義の父親・辰方は、その貞丈の孫で養子の貞春に師事していたことが分かっているため、松岡一家が伊勢流故実学を学ぶ中で、彦磨と行義にも、何らかの学術的な交流がもたれた可能性はあるだろう。ともあれ、行義と彦磨によって、活発に平安朝物語の図説化が行われたことで、一九世紀はじめから一九世紀半ば頃にかけて、平安朝物語図説の最盛期的様相を示していると言える。

さて、前述したとおり、本稿で紹介した『源氏装束図式文化考』、『源語図式抄』は、それぞれ享保二年と宝暦五年を成立上限とする以外に、はっきりとした成立時期は分かっていない。しかし、平安朝物語図説化への志向が、行義や彦磨の個人的なものではなく、一八世紀末から一九世紀半ば頃までの一つの時流であったとするならば、おそらく『源氏装束図式文化考』や『源語図式抄』もまた、この時期に、そうした気運の一角で執筆された可能性は、考えられ

るのではないだろうか。

中野貞利なる人物による『源氏装束図式文化考』は、享保二年版『源氏男女装束抄』に図が呈されていないことを問題視し、記されたものだということは、その跋文内容のもと、既に述べた。それは『源氏男女装束抄』に限らず、貞利が知る限りでは、「前代に『源氏物語』を図説した書が存在しない」ということをも意味すると思われる。つまり、『源氏』の注釈には図像が必要だ」という貞利の問題意識は、行義の『源語類聚抄』序文に記される問題意識と、非常に近いのである。こうしたことが、自序・自跋の内容から読み取れることも、その成立期の近さを窺わせる。

また別の側面から、これらの書の執筆目的が、近世中期頃までのそれとは変化していることについても述べておきたい。本稿の冒頭近くに触れた、中世から近世中期までの故実家たちによる、『源語の装束抄』の類が、『源氏物語』の記述から、有職故実を学ぶために適した箇所を抄出し、注釈を施す、すなわち「物語を読解することよりも、有職を学ぶこと」に重点が置かれていたのとは対照的に、江戸後期に成立したこれらの書は、「有職故実の知識を物語読解に還元しよう」という意識で記されたことが、自序・自跋の内容から読み取れる。その執筆意図の在り方にも時代性が表れていると言えようし、また注釈史が辿った興味深い意識の変化としても注目されるだろう。

本稿は、筆者が今後取り組んで行こうと考えている、「近世期の有職故実学と、平安朝文学研究との関係」に関する研究を推し進める足がかりの一つである。研究は未だその入口付近にあり、残した課題も多い。更に研究を深めていくことを期しつつ、大方の御批正・御指南を待ちたい。

【注】

- ① 武井和人氏『一条兼良の書誌的研究 増訂版』（おうふう二〇〇〇年）。

- ② 小川陽子『源氏物語』と有職学——一条兼良から冬良、そして近世へ——（『平安文学の古注釈と受容 第2集』武蔵野書院二〇〇九年）。

- ③ 筆者は既に、国文学研究資料館蔵『源氏装束図式文化考』について、その概要を報告したことがある（国文学研究資料館平成二二年度研究成果報告『物語の生成と受容⑤』（『平安文学における場面生成研究プロジェクト』編平成二二年三月）。本稿の内容に重なる点があるが、出典など、新たに判明した点を加筆している。

- ④ 加藤悠希氏「有職故実家松岡行義の邸宅に関する知識について」（『日本建築学会計画系論文集』第七三巻第六三一号 二〇〇八年九月）。

- ⑤ 赤澤真理氏『源氏物語絵にみる近世上流住宅史論』第六章「住宅史研究の萌芽」（中央公論美術出版二〇一〇年）。

- ⑥ 前掲注⑤の赤澤氏論。

- ⑦ 鈴木健一氏（『勢語図説抄』解題）（鉄心斎文庫『伊勢物語古注釈叢刊 第一四巻』（八木書店二〇〇二年））は、『勢語図説抄』のように、参考図を充実させようと試みる注釈書が成立する背景として、近世期に至り、貴族の生活というものを身近に感じられない人々がほとんどである中、古典の世界と一体化する方途として図像化がどうしても必要になっていったこと、そして絵画が人々の生活の周辺に大量に存在する環境にあつて、図像化がごく自然な感覚によつて要請されていたということの二点を挙げられている。

【付記】

本稿は、国文学研究資料館 基幹研究「王朝文学の流布と継承」研究会（平成二二年五月二八日、於国文学研究資料館）における発表に基づく。当日席上にて、多くの貴重な御教示を賜った先生方に、厚く御礼申し上げる。御教示の

点を今回の論に反映しきれず反省しきりであるが、今後の研究に活かしたい。

また、本稿は科学研究費補助金（若手研究（B）「平安朝文学にあらわれる装束・調度品描写研究のための近世有職故実書研究」（課題番号 22720095 0001）による研究成果の一部である。